

大学生研究再考—社会的・発達の・教育的意義を問う—

企 画： 山田 剛史（京都大学高等教育研究開発推進センター）
 ： 奥田雄一郎（中央大学大学院）
 ファシリテーター： 山田 剛史（京都大学高等教育研究開発推進センター）
 ： 奥田雄一郎（中央大学大学院）

【企画主旨】

これまでも「大学生」は、青年心理学をはじめ、社会学、教育学といった諸領域の視点から多くの研究がなされてきた。しかしながら、それらの研究に対して多くの批判もなされている。第一に、大学生が青年の典型としてのみ用いられていること、第二に、調査結果の社会に対するアカウントビリティが不足していることなどである。また近年、大学生を取り巻く状況は、少子化に伴う大学設置基準の改定、独立行政法人化や大学全入、学力低下やフリーター・ニートといった職業問題など多様化・複雑化しており、これまでの研究の枠では捉えることが困難なものとなっている。

以上のことから本ラウンドテーブルでは、大学生を研究対象としている研究者が、議論を通じて問題意識を共有し、自身の研究を相対化し位置づけること、そして上述した問題意識に対する理解を深めることを目的とする。

【大学生研究の過去:基礎データの提示】

まず、大学生研究の過去として、これまでの青年／大学生研究を簡単に概観し、基礎データの提示とともに筆者らによる問題提起を行う。その問題点とは、筆者らが「大学生心理学」(山田・奥田, 2005a, b; 奥田・山田, 2005a, b)の中でも指摘しているように、第一に、大学生という、積極的意義が活かされてこなかったこと、第二に、大学固有の文脈がほとんど考慮されていないことなどである。そこで、本ラウンドテーブルでは、国内の心理学の主要研究誌である『青年心理学研究』『教育心理学研究』『発達心理学研究』および『臨床心理学研究』の4つのジャーナルにおいて、題目に「青年」もしくは「大学生」という語が含まれている研究を対象として、青年研究における大学生研究の比重(第一の点に対応)、内容面での比較(第二の点に対応)に加え、どのような方法が用いられているのかに関する比較も行う。対象とする時期としては、大綱化やバブルの崩壊など、大学における様々な問題を引き起こす契機となった時期である1990年からの15年間とする。

【大学生研究の現在:今の大学生を取り巻く諸問題の提示】

次に、大学生研究の現在として、今現在、大学生を取り巻く諸問題を提示する。今、大学生らにとって大学とはどのような場所なのだろうか。大学生らは、そこに関わる人、環境、そして活動、それぞれの影響を受けながら、自らの大学生活を意味づけている。筆者らは大学生が自らをどのように位置づけ、意味づけるかといった彼らの内面的な視点から研究を行うことの重要性を強調するも、その一方で、大学生の外側からの大学生に対する広い意味での環境要因を切り離して語ることはできないとも考えている。ここでは、特に後者の大学生を取り巻く環境がどのようになってきているのかといった点に関する資料を提示するとともに、先に挙げた過去の諸研究の変遷(マッピング)との関連性について簡単に触れる。そして、どの程度大学生が抱える諸問題や社会からのニーズに応えられてきているのかといった点について議論していきたい。

【大学生研究の未来:今後の大学生研究の在り方への問題提起】

最後に、大学生研究の未来として、これまでの大学生を扱った研究の概観と現在の大学生を取り巻く諸問題に関する概観とを踏まえた上で、社会的・発達の・教育的な観点からみて今後の大学生研究がどのような道を進んでいくことが可能なのか、そのための研究にはどのような認識論や方法論を用意しなければならないのかといった点について議論したいと考えている。

本ラウンドテーブルでは、特に、大学生を扱う研究に携わっており、何かしらの違和感を覚えているという研究者に積極的に参加して頂き、『建設的な対話・交流の場』を創っていきたくと考えています。

(YAMADA Tsuyoshi ; OKUDA Yuichiro)